

# 松田存先生と能楽界

勅使川原 覚

まずもって、2022年6月20日に急逝されました故松田存先生のご霊前に、心から哀悼の誠をささげます。松田先生と私は、二松学舎大学三年時の中世劇文学ゼミとして、中世文学をご教授いただいたのが、始まりです。大学卒業後も大学院進学に伴い、引き続きご教授いただきました。ゼミ時代から、たびたび、当時は渋谷松濤の観世能楽堂での観能の機会をいただき、大学院時代のアルバイトとして、梅若万三郎家の梅若研能会事務局をご紹介いただきました。当時、内弟子修行から独立した、加藤眞悟先生とその事務を引き継いだことにより、加藤先生から現在も能楽をご指導いただいております。現在の私が能楽に携わることができたのも、松田先生によるところが大きいと思います。

能楽界では、葬儀などの法事の際に、「江口」のキリの部分を故人に手向けて謡うという習わしがありますので、未熟ではございますが、心を込めて、「江口」の謡を手向けたいと思います。

手向けの謡 「江口」キリ

へ思へば假の宿。思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我

なり。

これまでなりや帰るとて、すなわち普賢菩薩と現れ、船は白象となりつつ、光と共に白妙の白雲にうち乗りて、西の空に行き給ふ。ありがたくぞ覚ゆる。ありがたくこそは覚ゆれ。

それでは、私の発表項目は「松田先生と能楽界」というテーマです。

まず、加藤眞悟師が主宰します眞謡会の機関紙「眞謡」第8号及び梅若万三郎家、財団法人梅若研能会が、一番身近な接点ですので、梅若研能会が発行しています月刊誌「橘香」から紐解いていきたいと思っております。

松田先生は長年、梅若研能会の評議員でした。このことから梅若万三郎家とは近い位置にあったものだと思います。

「眞謡」8号は、当時、私が編集をしておりましたので、松田先生に原稿を依頼しましたところ、快く寄稿していただきました。

後半部分に、私の結婚式は先生が仲人として、加藤先生が新郎新婦の入場の際に「高砂」を謡っていただいた、そのエピソードが記されております。

平成30年8月の「橘香」で、世阿弥の

『風姿花伝』の言葉を引用し、「古木を学び、新しきを賞する中にも。」とあり、「橘香」の第一次創刊が、昭和15年4月、第二次復刊創刊が、昭和31年1月と歴史のある機関紙であることを紹介し、歴史のある中から、新しいものを見つけなさいとの教えを執筆されています。

平成30年4月の「橘香」のエッセーでは、先生が演劇・劇文学を探究するきっかけとなった「蛍雪時代」の広告、飯塚友一郎博士の「演劇入門」との出会いが克明に記されており、愛蔵書となっていることがわかります。そして、二松学舎大学に入学され、飯塚先生の講義を受け、ご自身が飯塚先生の遺志を継いでゼミを創設されたことがうかがえます。

最終部分には、「(前略)また能・狂言にしても、古くは猿楽で、これを包括しての能楽という呼称は、概ね明治以降のこととして、能は謡曲という台本による舞台でのパフォーマンスとして捉えたい。そして謡曲こそが真に文学作品であり、能こそが芸能だということになるだろうか。」とあります。

松田ゼミの会報第1号に先生が「創刊に当って」と題されて、執筆されていますが、その中にも、

「(冒頭略)したがって創刊に当っては、まず、当ゼミの経緯についてふれておかなければならないであろう。当ゼミは、もともと飯塚友一郎先生が主宰される戯曲研究ゼミがその緒であった。先生が昭和五十二年三月末をもって退任されることになり、新年度から私が飯塚先生のゼミを継承すること

になったものである。(中略)前任者である飯塚先生と初めて接したのは確か高校二、三年も頃だったかと思う。当時、受験勉強に追われながらも、旺文社版の「演劇入門」を読んで、次第にその筋に傾倒していったのは確かである。後年、演劇学会などでお目にかかって御高説に耳を傾けるのはもちろん先生のご専攻は近世、そして私は主として中世ということで、遅々としてではあるがいわば師弟の関係が育まれていった。(以下略) (昭和55・11・15「二松学舎大学中世文学(松田)ゼミ会報」第一号(昭和55年12月15日発行)より。

令和元年11月の「橘香」の巻頭言では、本会の「世阿弥忌の集いシンポジウム」と題されて、執筆されています。世阿弥学会について、最初の東京オリンピックから今回の東京オリンピックは、ちょうど50年という節目に当り所感を述べておられます。この記事については、たびたび「橘香」でも記述されておりました。いろいろと思い出深いことがあったものと推察されます。

「梅若研能会90年の歩み」が2018年10月12日に発行され、目次に、「機関紙「橘香」の歩み」と「梅若研能会の海外公演」の2項目について執筆されています。海外公演については、記述のとおりですが、梅若研能会は、昭和42年のイギリスを皮切りに毎年のように世界各国に派遣されています。

世界を股に駆けた能楽師ですが、松田先生も世界各地に赴き能楽普及に努められました。私もご一緒にニューヨ

ーク公立図書館へ行きましたが、ベニート・オルトラニ教授やコロンビア大学、ニューヨーク市立大学での講演などが思い出されます。

最後に、松田先生の能学会でのご業績に敬意を表し、先生との師弟関係を育ませていただいた御縁に感謝し、先生のご遺志を継いで、能楽普及に微力ながら努力してまいりたいと、ご霊前

にお誓いして、私の発表を終わりにします。

\*この原稿は令和4年8月28日、第30回「世阿弥忌の集い」の発表原稿をもとにしています。

(作者紹介：伊勢崎市民病院副院長兼経営企画部長・眞謡会副会長)